

監訳の序

とても身近で深みのある検査、それが心電図だと思います。でも、心電図ってとてもやっかいですよね。どうすれば読めるようになるのだろうかと思っている人の方が多いと思います。心電図判読のための最短コース、それはズバリ一言、『**多くの心電図に触れる**』。これに尽きると思います。講義や本で読めるようになった方はどの程度いるでしょうか？ 実際にはとても少数派のはずです。多くの方はその時はわかったような気になっても、現場に戻るとさっぱり読めない、こんな経験ばかりではないでしょうか？

心電図を読んでいる時の頭の中の流れは、まず緊急性の有無、異常か正常かのざっくりとした**“判断”**を行い、その後詳細な波形の評価をし、最終的な**“診断”**に至ります。ですので、**まずは判断できることがファーストステップである**と言えます。多くの心電図に触れないと自分の中に許容範囲の**“判断”**基準はできませんが、いったん「このくらいなら大丈夫かな」といった基準ができると、本や講義の内容も嘘のように身に付くようになり、詳細な**“診断”**ができるようになります。

今は若い方の経験値を高める機会が以前より減っていると感じています。まさにこの本は経験不足をカバーするにはうってつけだと感じています。この本は、心電図の最も重要なコンポーネントの一つ、調律に強くフォーカスしています。ST変化などについてはあまり触れられていないので不満に感じる方もいるかもしれませんが、ただこの一冊で調律についての十分な**“判断”**基準を身につけることができますので、病棟や外来で忙しく働く医師や看護師にはちょうどよいと思います。

監訳に際し、著者の想いを本の中にできるだけ残すことが役割と思い、可能な限り原文のニュアンスを伝えるよう努力し、日本語として読みやすくなるよう配慮しました。皆さんが手にしたこの本が心電図判読のまさにファーストステップとなれば、これ以上の喜びはありません。最後に監訳という貴重な経験を与えていただきました羊土社編集部の皆様に感謝の意を添え、監訳の序としたいと思います。

医療法人社団ゆみの 最高開発責任者
西原崇創